

第7章 総括

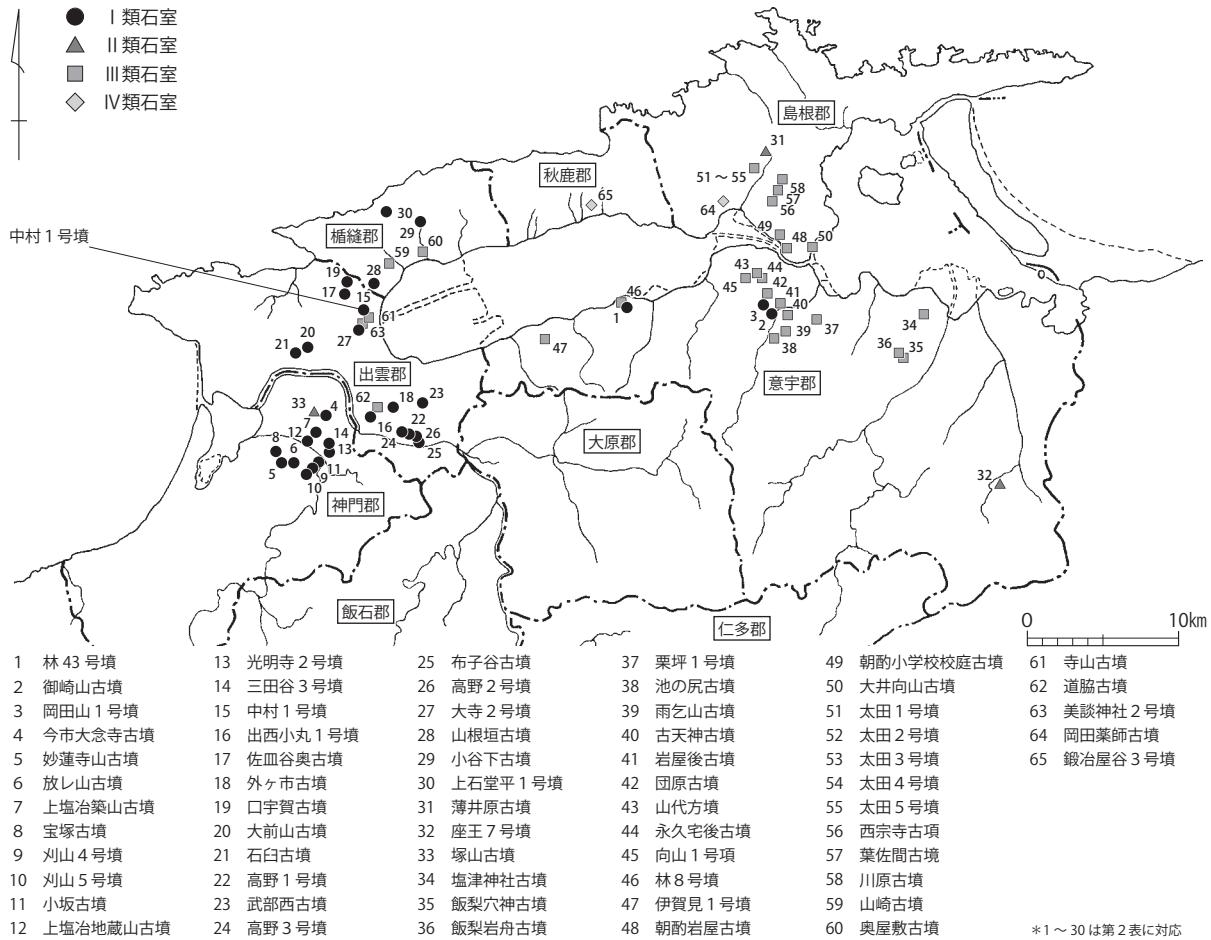
第1節 横穴式石室の玄門構造からみた中村1号墳

1 はじめに

中村1号墳は、横穴式石室玄門の楣石に接する玄室天井石が重機により壊されて発見された。幸いにして、玄門部の構造がよくわかり、特に楣石の巨大さが目立つ。また、石室床面の断割調査によつて、袖石は全長の約3分の1が埋められていることと、袖石を立ててから側壁を積むことがわかった。これにより、横穴式石室における袖石の重要性を改めて認識することができた。

発掘調査で明らかになったこの袖石の重要性から、本稿では玄門部構造の変化に注目して、中村1号墳の横穴式石室を出雲の横穴式石室編年に位置付けたいと思う。そして、中村1号墳が所在する地域の状況についても検討してみたい。

論を進めるにあたり、出雲の地域区分が重要になってくる。そこで、以下のとおり出雲地域の小地域区分を定義しておきたい。出雲の後期古墳の埋葬施設には、玄門部が両袖の横穴式石室と出雲型石



第1図 本稿で扱う主な横穴式石室の分布 (1:500,000)

棺式石室やその亜流と考えられる石室が主体をなす。前者は出雲西部に、後者は出雲東部に多く分布していることが分かっている（山陰考古学研究集会 1996）。また、出雲国は、意宇郡・島根郡・秋鹿郡・楯縫郡・出雲郡・神門郡・飯石郡・仁多郡・大原郡の9郡からなることが733年に編纂された『出雲国風土記』で明らかで、中村1号墳の所在する島根県出雲市国富町は、出雲郡にあたる。仁木聰は、先学による6世紀末以降の古墳研究の成果をもとに、古墳資料が多い意宇郡・出雲郡・神門郡の状況を的確にまとめている。「出雲国の古墳群を語るには宍道湖東部・中海沿岸部を代表する出雲東部勢力と、宍道湖西部・神戸川下流域の出雲西部勢力の領域形成と、その勢力範囲が重なり合う宍道湖北西岸の楯縫郡と出雲郡東部の勢力の存在が重要である」と指摘した。そして、「出雲東部勢力は意宇郡に、出雲西部勢力は神門郡に移行しているもの」とした（仁木 2010, 246頁）。そこで本稿では、仁木が指摘した3地域区分を基に、『出雲国風土記』に記載のある郡を地域単位とし論を進めていきたい。そして、本稿で対象とする地域を、意宇郡・島根郡・秋鹿郡・楯縫郡・出雲郡・神門郡とする⁽¹⁾。ただし、横穴式石室が盛行する6世紀末～7世紀前半に、郡域が明確に分かれていたと考えているわけではない。

2 研究史と問題の所在

（1）出雲における横穴式石室の研究史

出雲における古墳時代後期の石室墳の研究は、出雲型の石棺式石室を中心に進められてきたと言つても過言ではない。それは、出雲考古学研究会の精力的な測量作業と研究によって刊行された『石棺式石室の研究』に集約されている（出雲考古学研究会編 1987）。研究史についても、石棺式石室を中心に詳細にまとめられている。そこで、本項では、出雲西部における横穴式石室編年を中心に研究史を振り返り、中村1号墳を評価する上での問題の所在を明らかにしたい。

出雲西部の横穴式石室研究は、横穴式石室の現況調査から始まる。1826年に出雲市今市大念寺古墳、1887年には出雲市上塩治築山古墳が開口し、それぞれの発見時の状況が伝えられている。その後、1897年にウイリアム・ガウランドが出雲市に所在する横穴式石室の本格的な実測図を報告（今市大念寺古墳、上塩治築山古墳、上塩治地蔵山古墳、半分古墳、塚山古墳）、さらに、1919年に梅原未治が、石室実測図（今市大念寺古墳、上塩治築山古墳、上塩治地蔵山古墳、塚山古墳）と墳丘測量図、遺物の実測図を紹介し出雲地方の特殊性を示した（梅原 1919）。その5年後、野津左馬之助が島根県内の石室を集成し、写真も掲載した。これにより、県内の石室墳の状況が明らかになった（野津 1924）。

戦後の1947年～1963年に山本清らによる出雲市内の古墳の発掘調査（放レ山古墳、上島古墳、出西小丸1号墳、大樋古墳、妙蓮寺山古墳）が始まった。この時の発掘調査成果が現在の石室編年における重要な材料となっていて、この発掘調査の開始が研究史上の大きな画期と言えよう。そして、山本は、横穴式石室の型式分類から考えられる地域区分、須恵器からみた古墳の編年を行っている（山本 1953・1956・1964）。特に、横穴式石室の型式から、東西出雲の地域差を明らかにし、「西部地区に後期の最も顕著な古墳の現れることは、このあたりが新たに極めて有力な豪族の根城となった」（山本 1953, 431頁）という考え方を示した。

1980年代になると、横穴式石室研究が活発に行われた。川原和人は、松江市岡田山1号墳および今市大念寺古墳と、上塩冶築山古墳の築造工程の相違を示した（川原 1982）。前者は楣石の架構を挟んで側壁を2度に分けて積み上げているのに対し、後者は側壁を一度に積んだ後、楣石を架構していることを指摘し、前者から後者への変遷を明らかにした。立体構造物である石室の築造工程の差を明らかにした成果は大きい。この川原の築造工程の研究を受け、島根県の九州系横穴式石室を検討したのが小田富士雄である。小田は玄室構造からみて、岡田山1号墳は福岡県日拝塚古墳、松江市御崎山古墳は福岡県王塚古墳と類似すると指摘し、これらの石室の上限を6世紀中頃とした（小田 1986）。

川原による築造工程という重要な視点が、その後の研究において十分に継承されたとは言えない。それは、その後の石室編年研究が、側壁の加工と側壁構成（段数）を重視した分類基準（土生田 1983、西尾・角田 1987・1989）で推し進められたからである。特に、その後に大きな影響を与えていたのが角田徳幸と西尾克己の研究である。角田と西尾は出雲西部の横穴式石室を、

1類：割石・自然石を用いるもの

2類：天井石をのぞく各壁に切石と切石積みの技法を用いるもの

3類：各壁を一枚石で構成するもの

に大別し、石室1～3期の石室編年を示した（西尾・角田 1987・1989）。

この頃、出雲考古学研究会により出雲東部に多く分布する石棺式石室の編年も行われ、出雲の東西の石室の平行関係が示された。そして、出雲考古学研究会は石棺式石室の分布や他地域の石室への影響から石棺式石室3期（出雲東部の山代方墳や永久宅後古墳の時期）に意宇中央部が「他地域に対する規制を強め、その地位を卓越し」、出雲西部地域も「独自性を失っていないものの、実質的に意宇の体制に組み込まれたと考えられるのである。ここに至って、後の出雲国となる領域（少なくとも沿岸部においては）がほぼまとめられた」と結論付けた（出雲考古学研究会 1987、260頁）。

佐藤雄史は、これまであまり検討されてこなかった島根半島西部の横穴式石室を集成し編年を示している（佐藤 1990）。これも、角田・西尾の側壁の加工と構成を重視した分類である。

その後は、御崎山古墳（島根県教委育員会 1996）、上塩冶築山古墳（島根県教育委員会 1999）、出雲市上石堂平1号墳（平田市教育委員会 2001）、出雲市美談神社2号墳（花谷 2008）の詳細な調査報告がなされ、それぞれで出雲における石室の位置付けが行われている。特に大谷晃二は、上石堂平1号墳の報告で角田・西尾や佐藤の出雲西部の石室分類を整理・発展させ編年を行った（大谷 2001）。この大谷の論考も、基本的に側壁の加工と構成によりA型～D型に分類し、それぞれを石室1期～4期に編年するものである。

近年、角田徳幸は山陰における九州系横穴式石室についてまとめ（角田 2007）、また、出雲考古学研究会が行った石棺式石室編年の細分を試みている（角田 2008）⁽²⁾。その中で、東西出雲の関係について、「西部の後期古墳に東部の要素が入りながらも変容され自立性が保持されること、両者は対立よりもむしろ連携する関係にあったことを示すものと考えることもできよう」と指摘した（角田 2007、77頁）。

副葬品から古墳の時期を決める研究も進んでいる。大谷晃二是古墳から出土した須恵器を中心に各

器種の詳細な型式分類を行い、それを基に古墳の変遷を明らかにした。そして、装飾大刀と馬具から畿内との平行関係を検討した（大谷 1994）。また、池淵俊一は出雲型子持壺の詳細な型式分類を行い、大谷須恵器編年に対応させつつ、子持壺の編年を行った（池淵 2004）。これにより、子持壺が単独で出土している古墳の時期が限定できるようになったため、石室編年の見直しが必要になってきた。

（2）研究史の問題と本稿の目的

以上、出雲西部の横穴式石室の編年を中心に研究史をまとめた。川原による築造工程からみた石室の変遷を考えるという重要な視点が早くから出されたが、その後は、側壁の加工・構成を基準とした編年が重視されてきている。第1の問題はこの石室の型式分類にある。この側壁の加工・構成を分類の基準とした編年の中で、最も新しい大谷の分類案（大谷 2001）を例にあげて問題を抽出する。

大谷は出雲西部の横穴式石室をA～D型に整理している。概要を示すと、

A型：割石・自然石を用い、奥壁はほぼ1枚で不足部分は1～2段の石材で補うもの

B型：天井石を除き切石で、奥壁は1枚。玄室側壁が4～5段積みのB1型と、2～4段積みのB2型に細分

C型：天井・各壁が切石の1枚石で構成されるもの

D型：狭長な玄室平面形で、玄室側壁に複数の石材を用い、玄門立柱石を側壁の内側につくるもの

大谷がA～C型の特徴とする「奥壁1枚、奥壁はほぼ1枚で不足部分を1～2段の石材で補う」という基準は、出雲郡や楯縫郡ではあてはまらないもの（中村1号墳、出雲市大前山古墳、出雲市石臼古墳、出雲市山根垣古墳）がある（第2表⑥奥壁参照）。つまり、奥壁の築造手法には地域性が認められる。また、C型は、各壁・天井を切石1枚石で構成するものとあるが、出雲市小坂古墳の左側壁は1枚石であるが、右側壁は1枚石ではないのでこの分類基準にあてはまらない。側壁を積む段数においても、小坂古墳のように左右の段数が違うものがあり、型式認定が難しい。以上のように、側壁と奥壁の石を積む段数を分類の基準にすると、例外がいくつかあり、石室の型式認定をする際には曖昧な基準であると言える。また、石材加工についても、石棺式石室は当初から切石が採用されているが、石棺式石室から変容したと考えられるものの中には自然石・割石を積んでいるものがある。このように、石材加工については各地域で変化する可能性があるので、出雲西部で自然石・割石から切石へと全ての地域で同じ変化をたどったとは断定できない。つまり、側壁が自然石・割石であれば、古い特徴をもつとは言えないかもしれない。

したがって、本稿では側壁の加工・構成を最優先の分類基準とはしない。横穴式石室は立体構造物であり、構造的にその変遷を明らかにする必要がある。中村1号墳で明らかになった袖石の重要性と川原和人の指摘した築造工程という視点を踏まえ、玄門構造を分類基準にした石室の変遷を示すこととする。また、新たに玄門部に両袖をもつ石室の編年を示すことで、石棺式石室との関係も再検討し、そして、横穴式石室からみた出雲の地域区分を設定したい。これらの検討から出雲東部と西部の関係が、出雲考古学研究会が指摘したような意宇中央部（出雲東部）が他地域に対する規制を強めた状況であったのか、角田徳幸が指摘したような連携する関係であったのかも検討してみたい。以上のような検討から、出雲東西勢力の実態が明らかになるとともに、中村1号墳の出雲における位置付けがで

第1表 出雲における横穴式石室の実年代比較

石室時期	出雲東部の石棺式石室	角田 2008	大谷 2001	本稿
1期	古天神古墳・伊賀見1号墳	6世紀中葉	6世紀後葉(出雲3期)	6世紀後半
2期a	岩屋後古墳・朝酌岩屋古墳・林8号墳	6世紀後葉	6世紀末～7世紀初頭(出雲4期)	6世紀後葉～7世紀初頭
2期b	太田2号墳・向山1号墳・飯梨穴神古墳			
3期a	山代方墳・葉佐間古墳	6世紀末～7世紀前葉		7世紀前葉
3期b	永久宅後古墳・雨乞山古墳・飯梨岩舟古墳		7世紀前葉(出雲5期)	

石室時期	出雲西部の横穴式石室	角田・西尾 1989	大谷 2001	本稿
1期	今市大念寺古墳・妙蓮寺山古墳	6世紀中葉～後半		6世紀後半
2期	上塙治築山古墳	6世紀後半～末	6世紀後半(出雲3期)	6世紀後葉～7世紀初頭
	宝塚古墳		6世紀末～7世紀初頭(出雲4期)	7世紀前葉
3期	地蔵山古墳・小坂古墳	6世紀末～7世紀前半		

きるであろう。

第2の問題は、実年代である。現状で、出雲の古墳時代後期の研究を牽引している角田徳幸と大谷晃二の実年代は微妙に異なっている（第1表）。この差については、当事者の議論が積極的に行われていないため詳細なことは不明であり、また、実年代の問題は出雲の資料のみでは解決できない。本稿では、須恵器や円筒埴輪、装飾大刀、馬具の研究を行っている大谷の年代観を一部修正し、新たな石室編年に合わせて本稿の実年代を示しておくこととした。

3 出雲における導入期の横穴式石室

中村1号墳を理解するために、横穴式石室がどのように出雲に導入されたかを確認しておく。本項では川原和人が示した築造工程に注目し、導入期の横穴式石室について評価しておきたい。導入期の横穴式石室の系譜については、小田富士雄（小田 1986）や角田徳幸（角田 1995a・1995b・2008）の研究があるので、改めて触れない。

川原の築造工程の指摘を発展させ以下の分類を提示する。まず、玄門部の構造から横穴式石室をI～IV類の4つに分類する（第2図）。

I類石室：玄門部が両袖のもの（北部九州系）

II類石室：玄門部が片袖のもの（畿内系）

III類石室：玄門部が削抜玄門の石棺式石室と呼ばれるもの（中部九州系）

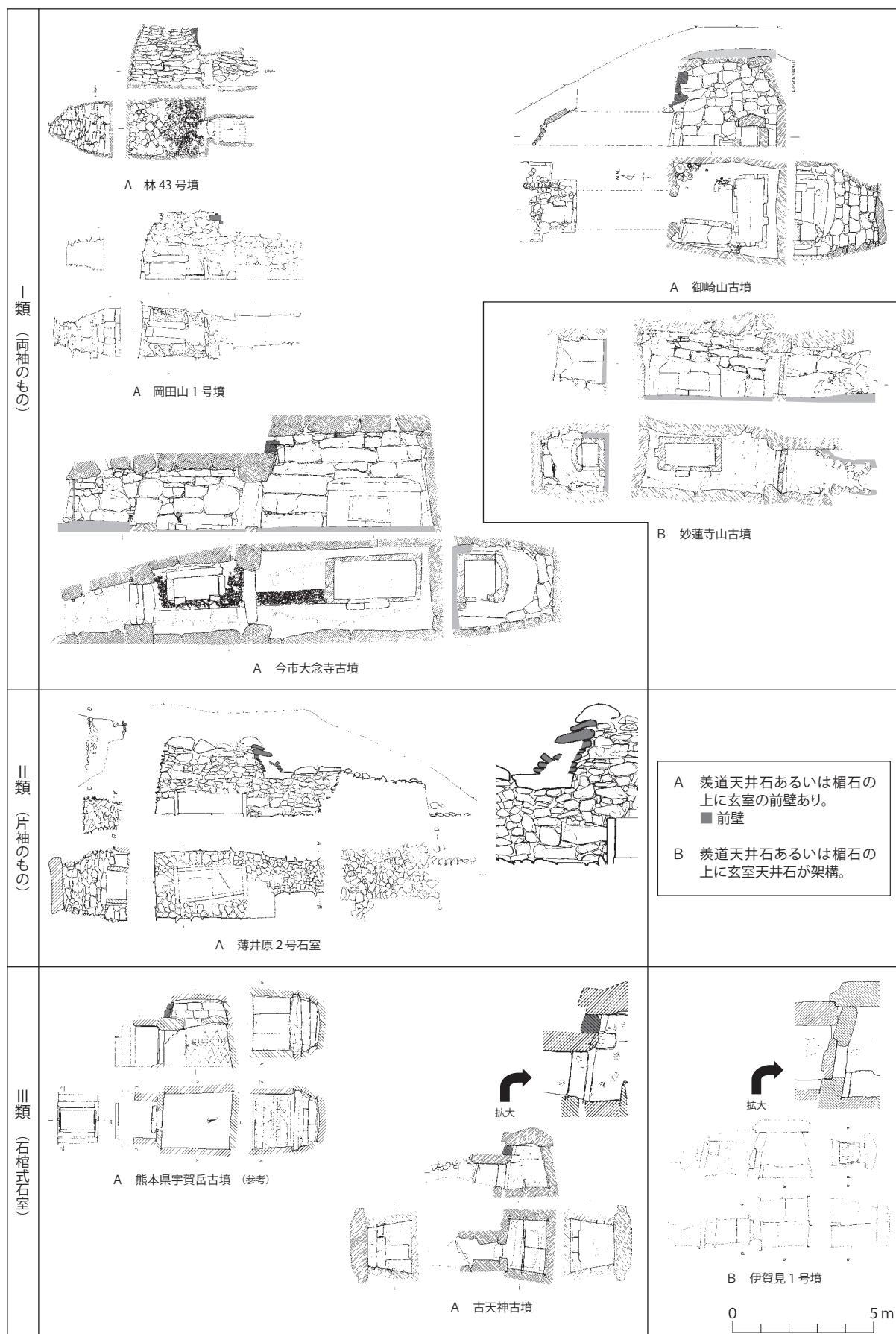
IV類石室：無袖のもの

これらの玄門部の構造を大まかにAとBの2つに細分する。

A類：羨道天井石あるいは楣石の上に玄室の前壁が積まれるもの

B類：羨道天井石あるいは楣石の上に玄室前壁ではなく玄室天井石が直接架構されるもの

I A類は松江市林43号墳（出雲2期）、御崎山古墳（出雲3期）、岡田山1号墳（出雲3期）、今市大念寺古墳（出雲3期）、I B類は妙蓮寺山古墳（出雲3期）となる。II A類は松江市薄井原古墳1・2号石室（出雲2期）があり、それ以降で玄門部の構造が分かるものはない⁽³⁾。III A類は松江市古天神古墳（出雲3期）があり、これの祖形と考えられている熊本県宇賀岳古墳と同じ構造をなす。III B類



第2図 出雲における導入期の横穴式石室 (1 : 200)

は松江市伊賀見古墳（出雲3期）があげられる。IV類にはIVA類はない。IVB類は松江市岡田薬師古墳（出雲3期）、松江市鍛冶屋谷3号墳（出雲3期）があげられる。出土須恵器などの副葬品からA類→B類の変遷が考えられる。

A類→B類への変遷がわかる石室は、神門郡にあるI類石室の今市大念寺古墳（A）→妙蓮寺山古墳（B）⁽⁴⁾と、意宇郡にあるIII類石室の吉天神古墳（A）→伊賀見古墳（B）である。A類は須恵器の出雲4期以降みられない構造であり、導入期の玄門構造と考えられる。A類→B類の変遷は、玄室の構造を安定させるため玄室上部の構築物を省略した結果、つまり構造簡略化の方向性と考えられる。そして、I類石室とIII類石室が同じように変化している（II類石室も？）ことは重要で、系譜が異なる石室であるが、同じように構造簡略化に向け、初現形態を変容させていったのであろう。

4 出雲におけるI類石室の編年

中村1号墳は前項で分類したI類石室にあたる。そこで、I類石室の細分を行い中村1号墳を位置付けることにしたい。竪穴式石室と横穴式石室とが大きく違うところは、玄門と羨道の有無である。横穴式石室は、玄室に開口部つまり玄門を設けることでその部分の構造が弱くなる。この開口部の構築方法によって、石室の安定性や開口部の大きさが変わってくる。そこで、本項では玄門構造を最優先の分類基準とし、それにいくつかの属性を加え編年を組み立てたい。

（1）玄門構造の分類

I類石室の各石室の特徴を7項目に分けて整理したのが第2表である。その項目は①玄門部の構成、②袖石と側壁の関係、③玄室の天井石の枚数、④側壁の石積み段数、⑤側壁の加工、⑥奥壁の石積み段数、⑦奥壁と側壁の組み方である。結論を言えば、①～③は小地域を超えて時期を細分することができる属性である（以下、①と②を合わせて玄門構造と呼ぶ）。また、残りの④～⑦は地域性を表す属性と考えた。したがって、①～③を時期を細分する最優先の分類基準とし、a類～i類の型式の設定を行った（第3図）。

a類：①立柱状の袖石の上に側壁が積まれ、明確な楣石はない。その上に羨道天井石、さらに前壁が積まれ、玄室天井石が架けられるもの。

②袖石は左右の構造が異なり、単独の石あるいは、複数の石（前壁をなす）で築かれている。

③玄室天井石は3～4枚。（a類は林43号墳、御崎山古墳）

b類：①袖石の上に、前壁（側壁）が積まれ、その上に明確な楣石（羨道の天井石とは明らかに厚さが異なり区別できる）が架構される。さらに、玄室前壁（側壁）が積まれ、玄室天井石が架けられるもの。

②袖石は一石で立柱状をなす。側壁には挟まれない（c類～f類も同じ、以下省略）。

③玄室天井石は3～4枚。（b類は岡田山1号墳）

c類：①袖石の上に直接、楣石が架構され、さらに前壁を数段積み、玄室天井石が架けられている。

③玄室天井石は4枚。（c類は今市大念寺古墳）

d類：①袖石の上に直接、楣石が架構され、その上に玄室天井石が架けられるもの。

③玄室天井石は3～4枚。(d類は妙蓮寺山古墳、放レ山古墳、山根垣古墳)。

d'類：①袖石の上に直接、楣石が架構され、その上に玄室から羨道にかけて一つの天井石が架けられるもの。

*玄室天井と羨道天井がほぼ同じ高さとなっていると考えられる。玄室と羨道の天井がほぼ同じ高さになるのはe2類とf類からである。したがって、玄室の天井と楣石の関係から、dとfの中間型式としておく(d'類は小谷下古墳、口宇賀古墳?)。

e類：①袖石の上に直接、楣石が架構され、楣石の上には玄室天井石の下面は架けられないもの。つまり、楣石が玄室天井石を支えない構造のもの。

③e類は玄室天井石の枚数でe1類とe2類に細分できる。

e1類：玄室天井石が複数で2～4枚。(e1類は上塩治築山古墳、宝塚古墳、中村1号墳)

e2類：玄室天井石が1枚。(e2類は小坂古墳、出西小丸1号墳)

f類：①袖石の上に直接、楣石が架構され、楣石の上には羨道天井石が架けられるもの。

③玄室天井石は1枚。(f類は佐皿谷奥古墳⁽⁵⁾)

g類：①玄門が組合せの剣抜玄門状をなし、その上に直接、玄室天井石が架けられるもの。

②玄門が側壁に挟みこまれるもの。玄門で天井を支える意識が低下し、側壁と玄門で天井石を支えている。

③玄室天井石は1枚。(g類は上塩治地蔵山古墳)

h類：①袖石はあるが明確な楣石がないもの。袖石の上部は尖っており、袖石によって上部構造を支える形にはなっていない。玄室天井石は側壁の上に直接架けられている。

②袖石は一石で立柱状をなす。袖石の下部は側壁に挟まれていないが、上部は側壁に挟まれる。

③玄室天井石は2枚。(h類は大前山古墳、上石堂平1号墳)

i類：①袖石の上に直接、楣石が架構されるもの(玄門を直方体の石材で組み合わせて表現したものか)。その上に、玄室天井石が架けられる。

②袖石は立柱状をなし、側壁に挟まれる。側壁に袖石を挟み込むための剝り込みがあるものがある。

③玄室天井石は1枚以上。(i類は光明寺2号墳、三田谷3号墳、石臼古墳、大寺2号墳、武部西古墳、高野1～3号墳、布子谷古墳)

(2) 型式組列と時間的関係

先に分類したa～i類の各型式を須恵器および出雲型子持壺の編年と組み合わせたものが第4表である。第4図は出雲西部の子持壺と石室の関係を示している。出雲4期古相と考えられるC1型が上塩治築山古墳⁽⁶⁾と中村1号墳で出土していることから、石室e1類は出雲4期前半と考えられる。出雲5期と考えられるC3型が出西小丸1号墳で出土していることから、石室e2類は出雲5期となる。副葬品が無く、時期の決定ができない型式については、以下に時期決定の根拠を示しておく。f類(佐皿谷奥古墳)は玄門部に玄室天井石が架からないことや、天井石が1枚であることから、出西小丸1号墳のe2類に近い構造と考え、出雲5期と考えている。e2類と考えられる小坂古墳についても、

第2表 I類石室の特徴

意宇郡

	古墳	①玄門構成	②袖石と側壁	③玄室天井石	④側壁の石積み段数	⑤側壁の加工	⑥奥壁石積み	⑦奥壁と側壁	須恵器(大谷)	子持壺(池淵)	石室(本稿)
1	林43号墳	a	イ	不明	16段	割石	16段	β	2c期		1期
2	御崎山古墳	a	イ	4枚	8段	割石	6段	α	3期		
3	岡田山1号墳	b	口	3枚	11段	割石	10段	β	3期		

神門郡

	古墳	①玄門構成	②袖石と側壁	③玄室天井石	④側壁の石積み段数	⑤側壁の加工	⑥奥壁石積み	⑦奥壁と側壁	須恵器(大谷)	子持壺(池淵)	石室(本稿)
4	今市大念寺古墳	c	口	4枚	5~6段	自然石・割石	3段	α			1期
5	妙蓮寺山古墳	d	口	3枚	3~5段	自然石・割石	2段	α	3期		
6	放レ山古墳	d	口	3枚	4~5段	切石	1段	α?	4期	C1	
7	上塙治築山古墳	e1	口	4枚	4段	切石	1段	α	3~4期	C1	2期
8	宝塚古墳	e1	口	2枚	2~4段	切石	1段	α			
9	刈山4号墳	dかe1	口	3枚?	5段	切石	1段?	α	4期		
10	刈山5号墳	dかe1	口	不明	3段	切石	1段?	α			3期
11	小坂古墳	e2	口	1枚	1枚石と2段	切石	1段	α	4~5期		
12	上塙治地藏山古墳	g	ハ	1枚	1段	切石	1段	α			
13	光明寺2号墳	i	ホ	1枚	1段	切石	1段	α			4期
14	三田谷3号墳	i	ホ	不明	2段以上?	切石	1段	α	6b・c期		

出雲郡

	古墳	①玄門構成	②袖石と側壁	③玄室天井石	④側壁の石積み段数	⑤側壁の加工	⑥奥壁石積み	⑦奥壁と側壁	須恵器(大谷)	子持壺(池淵)	石室(本稿)
15	中村1号墳	e1	口	2枚	3段	割石・切石	3段	α	4期	C1	2期
16	出西小丸1号墳	e2	口	1枚	2段	切石	1段	α		C3	3期
17	佐皿谷奥古墳	f	口	1枚	2枚	切石	1段	α			
18	外ヶ市古墳	d~f	口	不明	2段~4段	自然石・切石	1段	α	4期		2~3期
19	口宇賀古墳	d'?	口	2~3枚	4段	自然石・割石	不明	α?			
20	大前山古墳	h	二	2枚	6段	自然石・割石	2段	α			
21	石臼古墳	i	ホ	不明	2段以上	切石	2段?	α			4期
22	高野1号墳	i	ホ	1枚	1段	切石	1段	α			
23	武部西古墳	i	ホ	1枚	2段	切石	1段	α			
24	高野3号墳	i	ホ	1枚	1段と2段	切石	1段	α			
25	布子谷古墳	i	ホ	1枚	2段以上	切石	1段	α			
26	高野2号墳	i	ホ	2枚	3段	切石	1段	α			
27	大寺2号墳	i	ホ	不明	2段	切石	1段	α			

楯縫郡

	古墳	①玄門構成	②袖石と側壁	③玄室天井石	④側壁の石積み段数	⑤側壁の加工	⑥奥壁石積み	⑦奥壁と側壁	須恵器(大谷)	子持壺(池淵)	石室(本稿)
28	山根垣古墳	d	口	3枚	3~4段	切石	3段	α			2期
29	小谷下古墳	d'	口	2~3枚	5段	自然石・割石	1段	α			
30	上石堂平1号墳	h	二	2枚	3段	切石	1段	α	6a期		

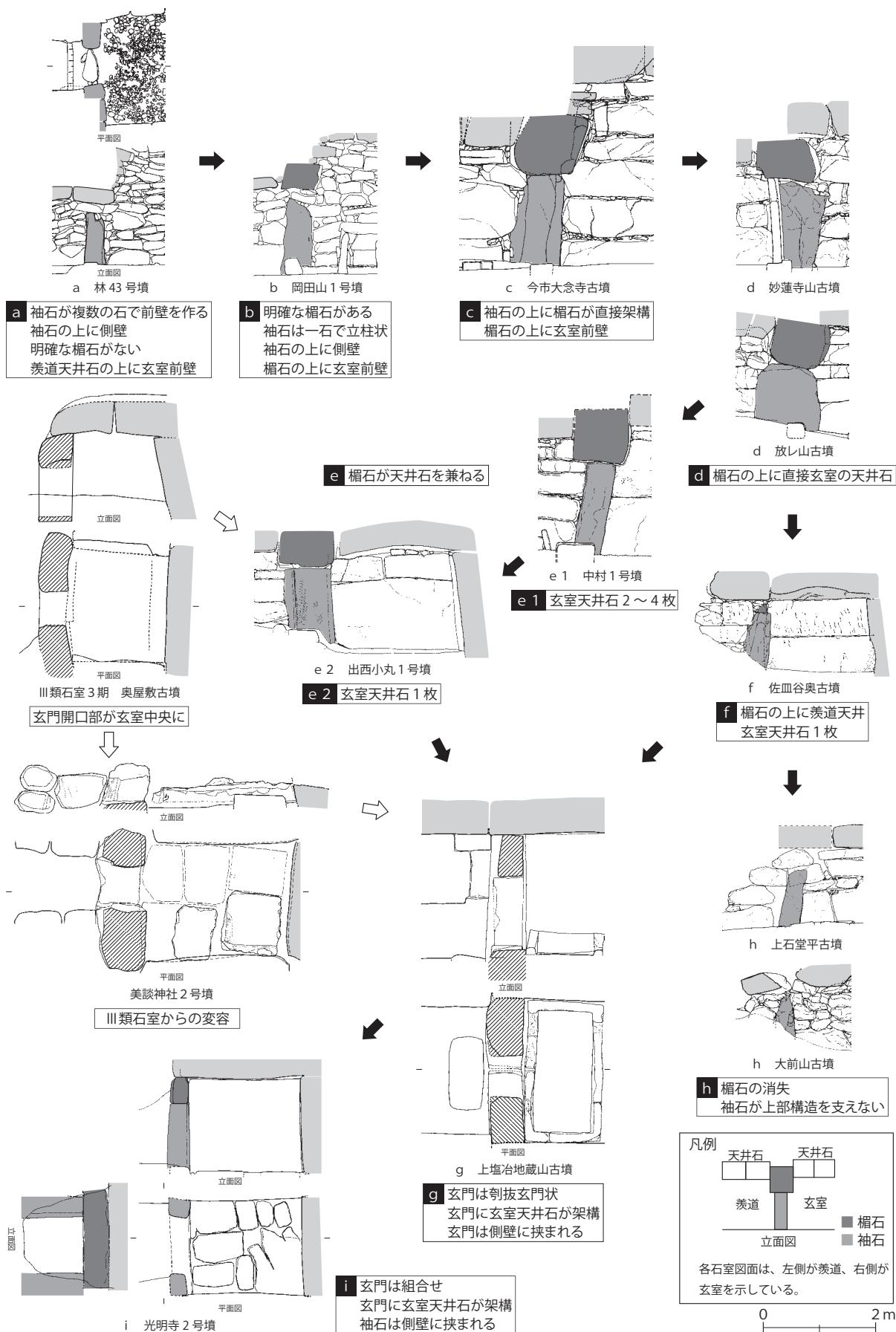
第2表の説明

②イ：袖石は左右の構造が異なり、単独の石あるいは複数の石で築かれている。口：袖石は立柱状に一石でたつ。ハ：玄門が組合せの割抜玄門をなし、側壁に挟みこまれるもの。二：立柱状の袖石の下部は単独でたつが、上部は側壁に挟まれるもの。ホ：袖石が側壁に挟まれるもの。

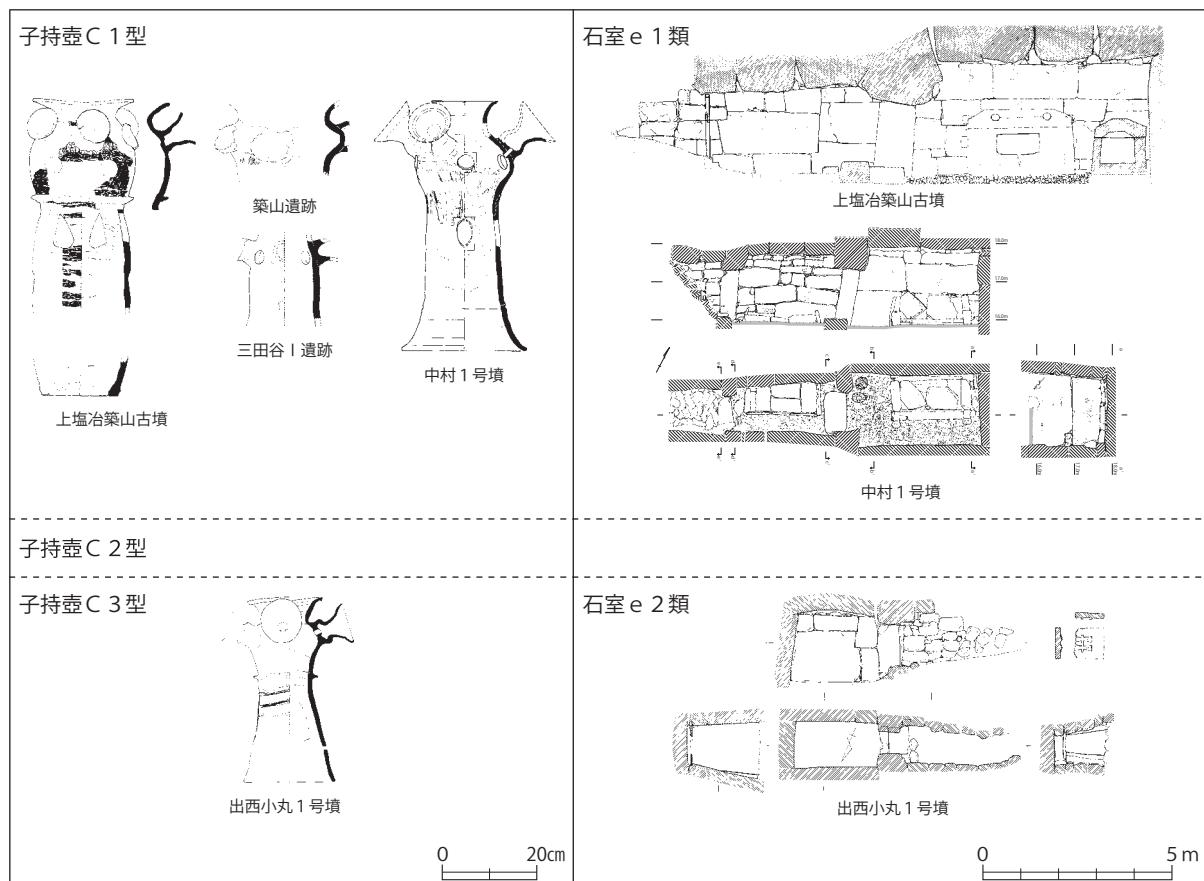
⑦α：両側壁で奥壁を挟むもの。β：その他

第3表 I類石室の分類

①玄門の構成	a	b	c	d	e1	e2	f	g	h	i
②袖石と側壁	イ				口			ハ	二	ホ
③玄室天井石			3~4枚		2~4枚		1枚		1枚	2枚
④玄室側壁の石積	8~16段	11段	5~6段	3~5段	2~5段		1~2段		3~6段	1~3段
⑤側壁の加工		割石		自然石・割石	自然石・割石・切石	割石・切石		切石		自然石・割石・切石
⑥奥壁石積み段数	6~16段	10段	3段		1~3段		1段		1~2段?	1~2?段
⑦奥壁と側壁	α・β	β					α			
石室数	2基	1基	1基	3基	3基	2基	1基	1基	1基	9基



第3図 I類石室の玄門構造の分類 (1 : 100)

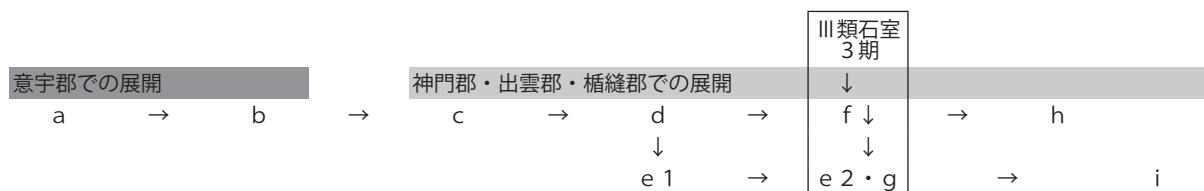


第4図 出雲西部における子持壺の変遷（子持壺1：16, 石室1：200）

第4表 出雲における副葬品からみたI類石室の変遷と特徴

石室	特徴	I類石室の玄門構造分類(本稿)									III類石室 (角田2008)	土器編年		
		a	b	c	d	e	f	g	h	i		須恵器(大谷)	子持壺(池淵)	畿内
1期	I類石室導入期	●									出雲2c期	A・B	TK10	
	楣式構造の確立	●	●	●	●									TK43
2期	玄門の独立				●	●	1				2a期	C1	TK43未 ～ TK209	
	石室分布の拡大				○d	○	1				2b期			C2
3期	III類石室の影響 玄門の形骸化					●	2	○	○		3a期	出雲5期	C3	飛鳥I
										●	3b期	出雲6a期		
4期	石室の終焉									●	4期	出雲6b・c期		飛鳥II

●: 遺物により時期ほぼ確定 ○: 遺物なし



第5図 I類石室の型式組列

出雲5期と考えている。小坂古墳からは出雲4期前半～5期の須恵器が出土したと伝えられている。一番古い遺物を初葬と考えるのが普通であるが、玄門構造e 2類・口類で、玄室天井石1枚など、出西小丸1号墳や佐皿谷奥古墳と型式的に近いと考え、時期も石室形態を重視してそれに近いと考えるのが妥当であろう⁽⁷⁾。e 1類の宝塚古墳も出土遺物がないが、同じe 1類の上塩治築山古墳や中村1号墳の出雲4期前半以降である。石棺の形態が上塩治築山古墳石棺より新しい（西尾1999）ので、出雲4期後半と考えておきたい。g類の上塩治地蔵山古墳も出土遺物が無く、時期決定が難しい。玄門が側壁に挟まれていることから、i類の出雲6b・c期に近い時期と考えられる。上塩治地蔵山古墳の特徴の1つである削抜玄門の類例は、出雲5期の美談神社2号墳（石棺式石室から変容した石室）にもある。また、石棺は西尾克己が指摘しているとおり宝塚古墳石棺と近い型式であるが、より後出の特徴を持っている（西尾1999）。したがって、出雲5期頃と考えておきたい。i類は9基確認しているが、時期が確定できるものは三田谷3号墳（出雲6b・c期）のみである。また、天井石が残っているものも少ない。今のところ出雲6b・c期と考えておくが、時期が出雲5・6a期に遡るものもある。新資料の発見に期待したい。

上記の検討から、各型式は一部同時併存しながら型式変化していることがわかる。そして、第5図の型式組列を導きだすことができ、第6・7図に石室編年図を示した。a・b類は出雲東部で出現・展開した。出雲西部にはc類が登場し⁽⁸⁾、その後、独自にd・e 1類へと展開する。そして、e 2・f・g・h類に変化し、i類で石室の築造が終焉するようである。

（3）石室編年の設定

以上、玄門構造における型式分類と変遷を示した。次に、これを建築工法の視点で評価してみたい。柱と梁で床や屋根を支える構造を「架構式構造」や「楣式構造」と呼び、木造住宅では一般的に在来工法といわれている。本稿では、玄門部に注目しているので「楣式構造」と呼ぶ。これに対し柱や梁を使わず壁体で構造物を支える構造を「壁構造」と呼び、木造住宅ではパネル工法や2×4工法などといわれている。

楣式構造とは、柱の上に楣といわれる建材を渡して開口部を作りだし、上部構造を支える構造である。つまり、横穴式石室の楣石は袖石と組み合わせて開口部（門）を作りだし、上部を支える構造と理解できる。一方、壁構造は、大きな楣を支えたり、大きな開口部を設けるには限界があり、高層建築には向かない。工法としてみると、I類石室が楣式構造に⁽⁹⁾、III類石室が壁構造にあたるであろう。

そこで、I類石室に楣式構造がどのように利用されているかみてみたい。a類は明確な楣石がなく、楣式構造ができあがっていない。b類で楣石が登場、c・d類になって楣式構造が確立されている。e類は楣石が天井石を支えない構造であり、楣式構造とは呼べない。玄門が独立した段階である。これは玄室の高さを低くしたため、上部構造を支える必要がなくなったからであろう。楣式構造としては退化とも考えられるが、上部を支えるということよりも袖石と楣石で造り出す「門」という意識が強くなった構造と考えられる。また、袖石は側壁の役割は保っている。g・i類は側壁と玄門で玄室天井を支える構造で、袖石が側壁に挟まれていることから、袖石が側壁を兼ねる役割が薄くなっている。楣石もなくなったh類もあり、かなりの機能退化が読み取れる。すなわち、玄門部で天井石を支

える機能は薄く、「門」という装飾的な意味合いのみとなった、あるいはかなり形骸化したものといえる。以上のことから、玄門構造に新型式が出現した時期を重視した石室編年を設定すると、石室1期（a～d類、出雲2c～3期）は楣式構造の導入から確立期、石室2期（e1類、出雲4期）は玄門の独立期、石室3・4期（g・h・i類、出雲5～6期）は玄門が形骸化した時期、と評価できる。

5 III類石室（石棺式石室）の影響

本項では、出雲西部におけるIII類石室（石棺式石室）の築造時期を示し、I類石室との関係を明らかにしたい。

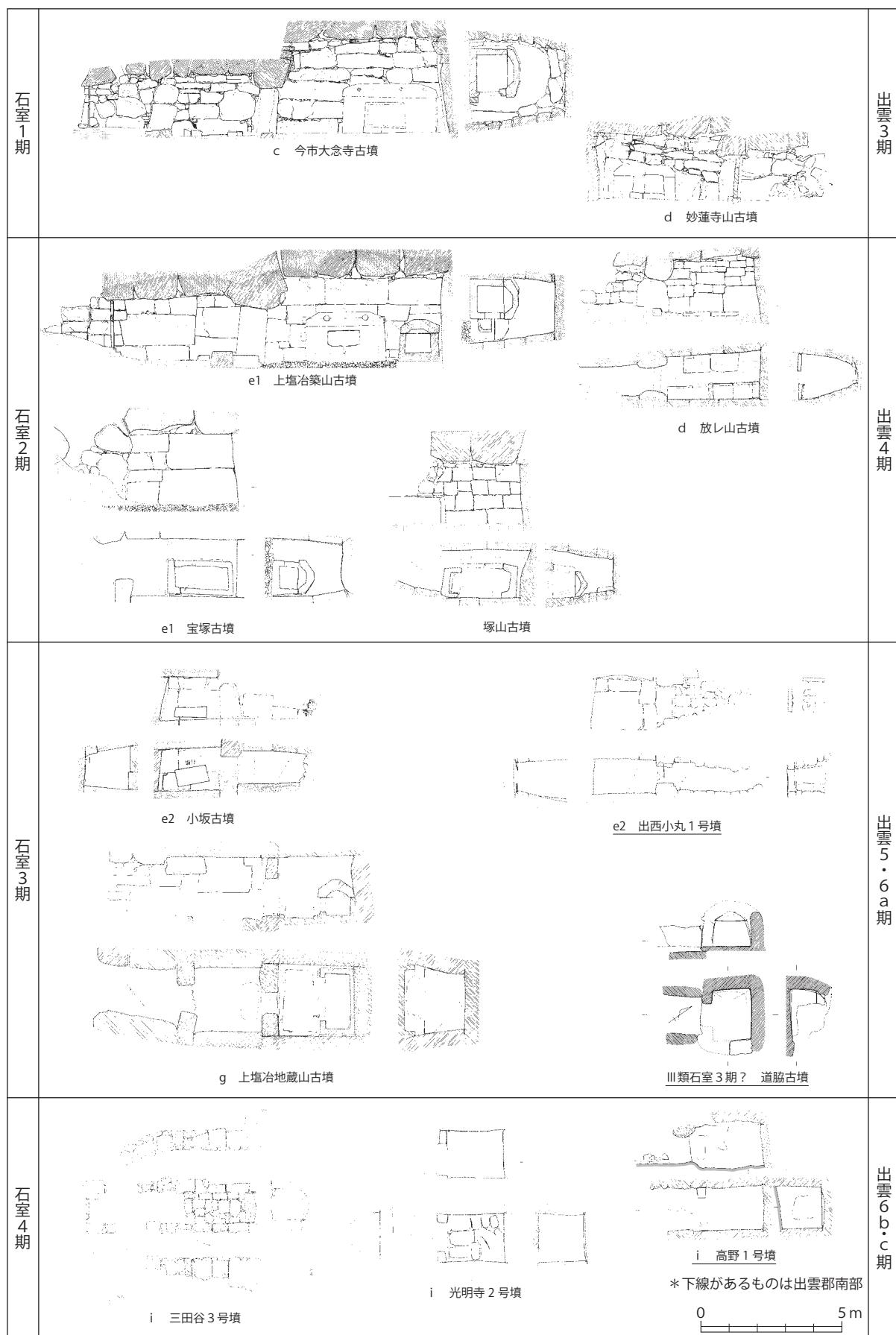
出雲西部にはIII類石室が3基確認されている。それは、寺山1号墳（出雲郡）、奥屋敷古墳（楯縫郡）、山崎古墳（楯縫郡）で（第7図）、遺物はいずれの石室でも確認されていない。まず、これら3基の特徴を、出雲考古学研究会が示した石棺式石室の編年と、それを細分した角田徳幸の編年に照合し、築造時期を検討する（第8図）。出雲考古学研究会は、石棺式石室（III類石室）を1～4期に編年した。III類石室1期（導入期）には古天神古墳と伊賀見古墳がある。この2基はIII類石室の典型的なものではない。2期と3期は典型的なIII類石室が造られた時期で、その特徴は①剣抜玄門・閉塞用の剣込をもつ、②切石を使用する、③各壁・天井石・床石は1枚石を指向する、④石材の組み合わせは前壁・奥壁で両壁を挟む、と定義された。そして、III類石室2期は玄門が石室の左右どちらかに偏り、III類石室3期は玄門が石室中軸線上に位置するとした。III類石室4期には、典型的なIII類石室が畿内の横口式石槻の影響を受けて変容していると指摘した（出雲考古学研究会 1987）。角田はIII類石室2期を玄室平面形から、横長長方形の2a期と正方形に近い2b期に細分した（角田 2008）。

さて、楯縫郡と出雲郡におけるIII類石室の寺山1号墳、奥屋敷古墳、山崎古墳をみると、いずれも①～④の要素をそなえた典型的なIII類石室であり、玄門はほぼ石室の中軸線上に位置している。このことから、これら3基は、III類石室3期と考えられる⁽¹⁰⁾。須恵器や子持壺の変遷と、I類石室およびIII類石室との平行関係を第4表と第6表に示した。具体的には、I類石室の小坂古墳、上塩治地蔵山古墳、出西小丸1号墳は出雲5～6a期に平行し、そして、III類石室の松江市山代方墳、松江市西宗寺古墳が同時期墳と考えておきたい。

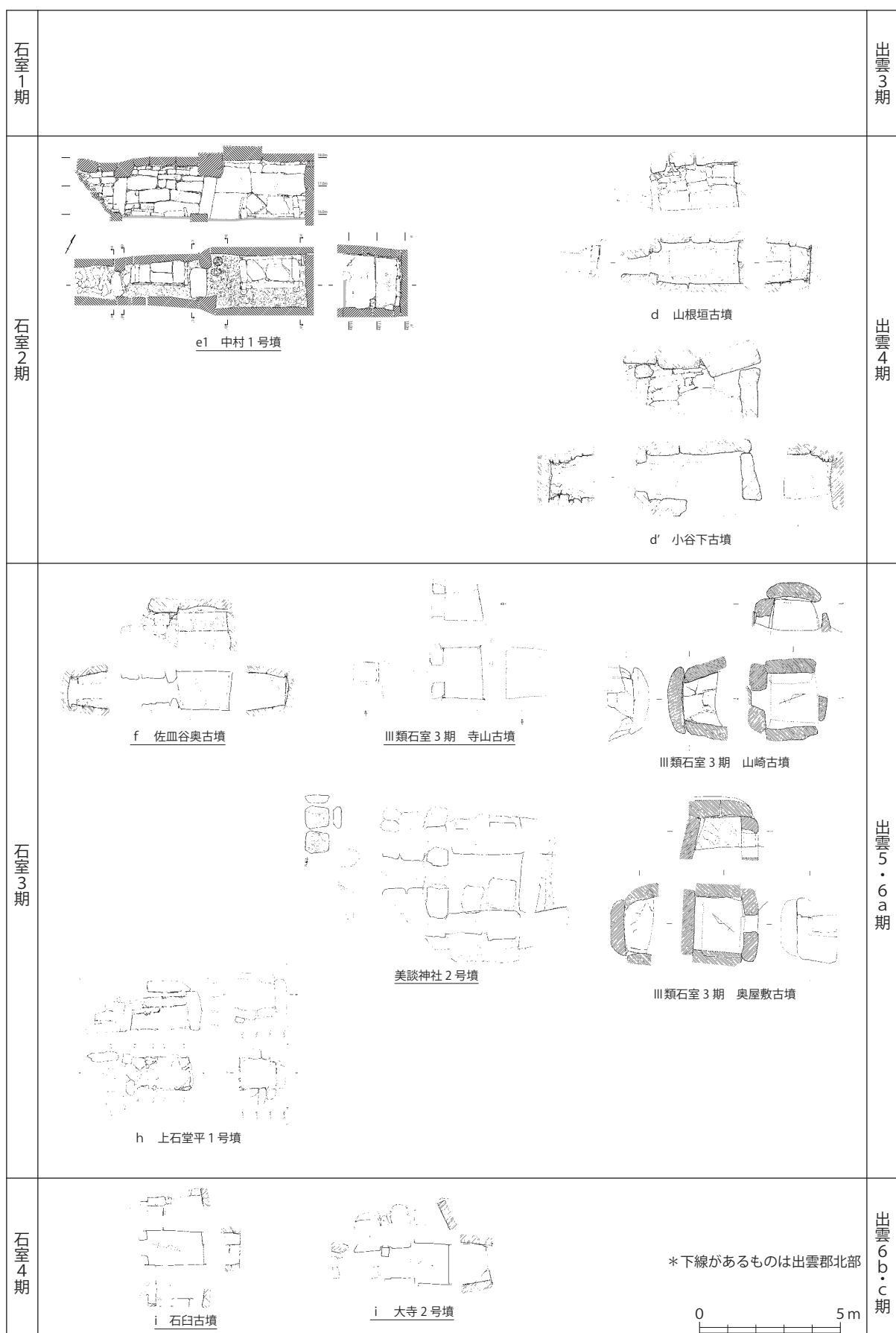
出雲西部においては典型的なIII類石室の分布が楯縫郡と出雲郡に限られ、神門郡には分布していない。では、神門郡のI類石室にはIII類石室の影響が及んでいないのか検討してみよう。

石室3期のI類石室にはe2類・f類・g類・h類がある。e2類・f類・g類に共通してみられる特徴として、玄室天井石が1枚であること、側壁が1枚石やそれに近いことがあげられる。また、e2類の小坂古墳には、袖石に羨道側壁をはめ込むための割りがある⁽¹¹⁾。出西小丸1号墳では、袖石に閉塞用の剣込をもち、板石閉塞がある。さらに、g類の上塩治地蔵山古墳には玄門が剣抜玄門状をなす（閉塞用の剣込はない）ことが上げられる。これらは、III類石室の影響と考えられる。

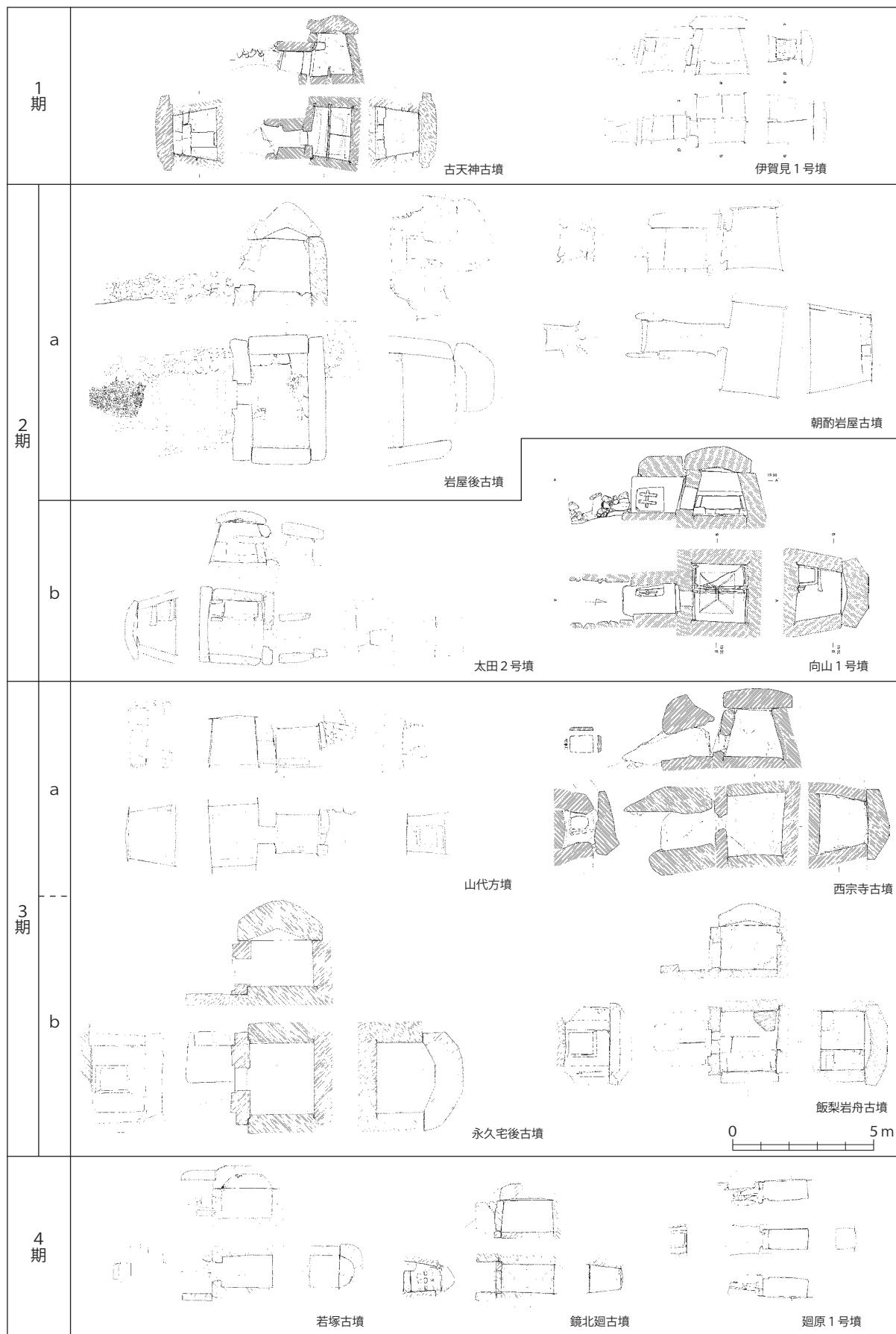
また、玄門の開口部面積にもIII類石室の影響が強く表れている。楣式構造のI類石室と壁構造のIII類石室（大きな開口部を作り出すことには限界がある）の開口部面積を時期別に比べてみた（第5表）。その結果、石室1～2期は工法の違いが明確に表れ、I類石室の開口部面積がIII類石室の面積より大き



第6図 神門郡・出雲郡南部の横穴式石室編年 (1 : 200)

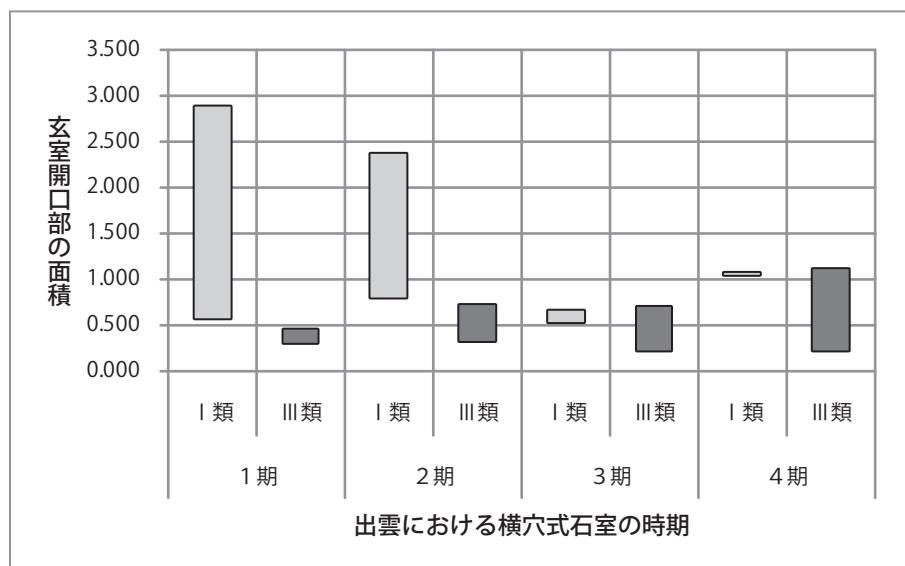


第7図 出雲郡北部・楯縫郡の横穴式石室編年（1：200）



第8図 意宇郡・島根郡におけるIII類石室の編年 (1:200) (西尾・角田 1987, 角田 2008 を改変)

第5表 I・III類石室の玄門面積の比較



いが、石室3～4期には工法の違いが表れず、I類とIII類石室の開口部面積はほぼ同じになる。これは、I類石室の開口部面積が急激に小さくなつたためで、楣式構造の形骸化が明確に表れたものと考えられる。そして、この楣式構造の形骸化は、III類石室の影響と考えられる。

次に、典型的なIII類石室との相違点をあげる。石室3期のI類石室の玄門構造をみると、e2類・f類では、玄門の上に玄室天井石が架かっていない。g類は玄門を両側壁で挟むが、III類石室は逆に玄門と奥壁で両側壁を挟むのが基本である。また、出雲西部のI類石室のほとんどは、両側壁で奥壁を挟み(α、第2表)、その逆はない。つまり、石材の組合せ手法という点では伝統を保っており、III類石室の影響を受けてはない。これは、石室の平面形の違いにも表れている。

以上のことから、石室3期のI類石室にIII類石室の影響を受けた部分と相違する部分があることがわかる。

次に、III類石室の玄門構造の特徴である玄門閉塞についてみてみたい。III類石室出現期である石室1期の古天神古墳(出雲3期)、伊賀見1号墳(出雲3期)は剖抜玄門があり、玄室を閉塞する構造である。その後も、III類石室は玄室を閉塞する構造が石室4期まで続く。一方、I類石室出現期の林43号墳(出雲2期)、御崎山古墳(出雲3期)、岡田山1号墳(出雲3期)は、玄門が閉塞されない構造である。したがって、I類とIII類石室の玄室の閉塞構造が異なることがわかる。そして、I類石室が神門郡に伝わると、玄門あるいは前門が観音開きで閉塞される今市大念寺古墳(出雲3期)と妙蓮寺山古墳が出現する。その後は、石室2期の上塩治築山古墳の玄門に切石を積んで閉塞した事例がある。袖石のある石室で玄室を観音開きの石材で閉塞する構造は、この時期までに西日本に類例がない。すなわち、神門郡にI類石室が採用される際にも、III類石室の玄室を閉塞するという構造が伝わったと考えられる。I類石室は立柱状の石材で門を構成することから、別の石材で閉塞施設を作り出す必要がある。そこで観音開きという構造を独自に造り出したのであろう。その後、上塩治築山古墳に切石を積む閉塞方法に変化した。しかし、元々、I類石室の構造になかった玄門閉塞は廃れ、中村1号墳やその後のI類石室には採用されなかつたようである。

6 I類石室の築造過程

中村1号墳は完掘していないが、床面の断割調査によって、石室築造過程が推定できるようになった。特に袖石と側壁との関係がわかったことが重要である。中村1号墳では、袖石を立てたあとに、側壁を積んでいる。これによって、石室平面形と規模が奥壁と袖石で決ると推定できる。中村1号墳の場合、袖石は3分の1が地中に埋まり、3分の2が露出させてある。類例に、h類の上石堂平1号墳がある（第9図）⁽¹²⁾。上石堂平1号墳も袖石を立て、盛土をしてから側壁を積んで、床石をならべている。袖石は3分の1を地中に埋め、3分の2を露出させている。中村1号墳と異なる点は、袖石上部が尖り、楣石がないことである。玄門としては退化した状況を示している。上石堂平1号墳の成果により、玄門が退化していても袖石を側壁より先に立てる伝統が残っていることがわかる。このことから、g類やi類の袖石が両壁で挟まれる構造は、袖石を側壁よりも先に立てる築造手法に起因していると考えることができる。付け加えておくと、Ⅲ類石室の玄室は、まず、床石を置き、側壁を立てた後に、奥壁と前壁で両側壁を挟み込む。I類石室とは築造過程が明らかに異なる。

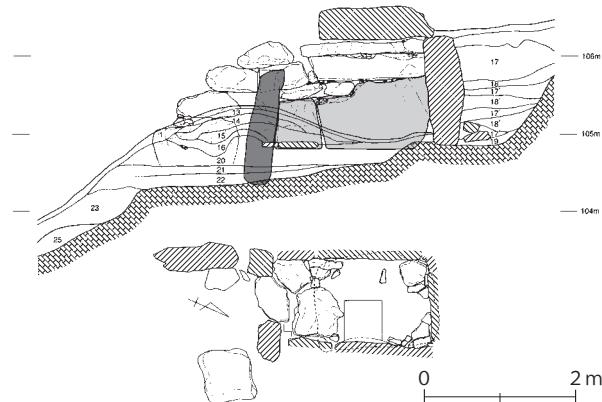
7 出雲における中村1号墳の横穴式石室の位置付け

はじめに、石室編年1～4期の各時期との特色を示す。石室1期はI類石室の導入期で、意宇郡でまず築造され、その型式変化したものが、神門郡に導入される。玄門部の構造は当初不安定なものだが、楣式構造が採用されて石室構造が安定化していく時期である。石室2期は、玄門部が独立したものが出現する段階である。また、I類石室が出雲郡と楯縫郡にも出現し分布が拡大する。丁寧に加工された切石石材が採用されるものもある。石室3期は、玄門部が形骸化する時期。また、出雲西部でⅢ類石室の影響がみられる時期である。石室4期は3期に引き続き玄門部が形骸化した形態がみられ、そして、石室築造の終焉段階である。

次に、旧郡単位での石室変遷過程をまとめておく（第4、6表を参照）。神門郡地域では、石室1期の後半にI類石室が導入される。最古の横穴式石室はc類の今市大念寺古墳で、出雲東部のb類（あるいはa類）から型式変化して、生まれた型式である⁽¹³⁾。楣式構造が確立し、上部構造を支え石室構



左袖石と左側壁



側壁と袖石の位置 (1 : 100)

第9図 上石堂平1号墳の玄門構造

第6表 出雲における主な横穴式石室の編年表

石室	神門郡	出雲郡	楯縫郡	意宇郡・島根郡・秋鹿郡	須恵器(大谷)
1期	今市大念寺古墳			林43号墳・薄井原古墳	出雲2c期
	妙蓮寺山古墳			御崎山古墳・岡田山1号墳・古天神古墳 伊賀見1号墳・岡田薬師古墳	出雲3期
2期	上塩治築山古墳・放レ山古墳 宝塚古墳・塚山古墳	中村1号墳 口宇賀古墳	山根垣古墳 小谷下古墳	岩屋後古墳・岡原古墳 向山1号墳	出雲4期
	小坂古墳・上塩治地藏山古墳	出西小丸1号墳・美談神社2号墳 寺山古墳・道脇古墳	山崎古墳・奥屋敷古墳	山代方墳・西宗寺古墳	出雲5期
4期	三田谷3号墳・光明寺2号墳	高野2号墳・大寺2号墳	上石堂平1号墳	永久宅後古墳 若塚古墳・鏡北廻古墳	出雲6a期 出雲6b・c期

太字は副葬品により時期がほぼ確定できるもの

造の安定化が読み取れる。その後の近い時期に、玄室の高さを低くしたd類の妙蓮寺山古墳が築造される。石材には、自然石・割石が採用されている。石室2期には、e1類の上塩治築山古墳が出現する。楣石が上部構造を支えなくなり、玄門は独立した構造である。石材には切石が採用されている。d類の放レ山古墳(切石採用)もこの時期である。石室3期には、Ⅲ類石室の影響がみられるe2類・g類がある。石室4期には、i類の三田谷3号墳が築造され、その後、8世紀頃になると石室は築造されなくなるが、光明寺3号墓のような石櫃を埋葬する火葬墓が築造されている。

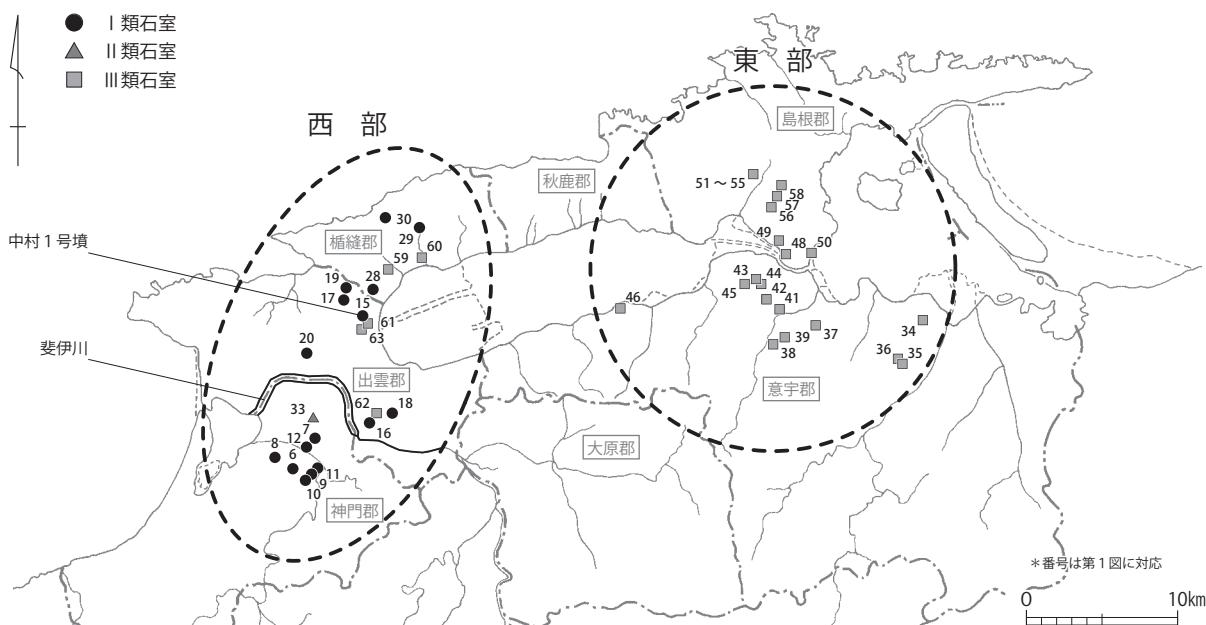
次に出雲郡地域について述べる。I類石室が導入されるのは石室2期になってからで、e1類の中村1号墳がある。これは、神門郡の上塩治築山古墳と同じ型式である。石室3期になると、典型的なⅢ類石室3期の寺山1号墳と、Ⅲ類石室が変容した道脇古墳や美談神社2号墳が築造される。e2類の出西小丸1号墳やf類の佐皿谷奥古墳といったⅢ類石室3期の石室の影響を受けた石室も築造される。そして、h類の大前山古墳も築造されている。4期にはi類の石臼古墳や大寺2号墳が築かれ石室の築造が終わる。

楯縫郡地域も出雲郡と同じく、石室2期にI類石室が導入される。d類の山根垣古墳・小谷下古墳である。石室3期には、典型的なⅢ類石室の奥屋敷古墳と、山崎古墳が築造される。そして、h類の上石堂平1号墳も築造される。石室4期の良好な資料はない。

各郡の地域性をまとめると楯縫郡と出雲郡には、Ⅲ類石室が入ってきているが、神門郡には、そのものは入ってきていない。また、切石技術が採用されている時期の小谷下古墳や大前山古墳には自然石と割石が採用されている。神門郡には、石室2期以降に切石造りの石室ばかりが採用されている。このような地域性が見られ、出雲郡と楯縫郡はほぼ同じ石室を築造していて、神門郡とはやや異なる。ただし、これら3郡とも玄門が形骸化する方向性は同じである。

出雲東部の意宇郡と島根郡の状況にも簡単に触れておく。石室1期の古段階(出雲2c期)にI類石室a類の林43号墳とⅡ類石室の薄井原古墳が、横穴式石室の最初の型式として導入される。その後(出雲3期)には、I類石室a類の御崎山古墳とb類の岡田山1号墳が、Ⅱ類石室は座生7号墳が引き続き築造される。また、Ⅲ類石室として古天神古墳と伊賀見古墳が最初に築造されている。他に無袖のⅣ類石室岡田薬師古墳、鍛冶屋谷3号墳がある。石室2期(出雲4期)以降には、Ⅲ類石室とそれから変容したものが築造され、I類とⅡ類、Ⅳ類石室は築造されていない。

以上のことから、出雲の地域設定を行いたい(第10図)。石室2~3期にI類石室が分布する範囲



第10図 石室2～3期における東西出雲の地域区分（1：500,000）

を出雲西部とし（神門郡・出雲郡・楯縫郡），出雲西部以外のⅢ類石室やそれが変容した石室が主に分布する地域を出雲東部（意宇郡・島根郡・秋鹿郡）とする。出雲西部は，さらにⅢ類石室やそれが変容した石室が分布する出雲郡・楯縫郡と，それらが分布しない神門郡の2地域に区分することができる。その境界はほぼ斐伊川にある。したがって，中村1号墳の石室は，出雲西部，その中でも出雲東部とも近い関係のある出雲郡・楯縫郡にある。また，出雲西部の大豪族の古墳と考えられる上塙治築山古墳と同じe1類であることは重要である。石室2期の出雲郡・楯縫郡の中には，他にe1類の石室はないので，中村1号墳と上塙治築山古墳は非常に近い関係ともいえる。

横穴式石室から東西出雲の関係をみると，石室1期と3期に出雲東部から西部へ影響が見られる。石室1期の出雲西部のI類石室c類（今市大念寺古墳）は，東部のb類（あるいはa類）からの型式変化と考えられる。また，今市大念寺古墳や妙蓮寺山古墳の玄門部での閉塞もⅢ類石室1期の石室の影響と考えられる。石室3期には出雲東部を中心に分布するⅢ類石室やその変容したものが出雲郡と楯縫郡に採用されていることが際立つ。また，I類石室の玄室開口部の面積が小さくなることも3期のⅢ類石室からの影響であろう。そして，石室ではないが石室2期の中村1号墳にも，出雲東部から灯明石をもつ組合せ式家形石棺が導入されている。

すなわち，基本的に石室1期～3期において常に出雲東部から出雲西部へ影響がみられるのである。特段に石室3期だけを取り上げて，出雲のまとまりを強調することはなく，石室1期にはすでに出雲のまとまりはあったと考えられる。つまり，出雲東部から西部への情報伝達があった上で，それぞれの地域の独自性を保って古墳の築造を行っていたのである。

以上の検討から，古墳時代後期の石室型式の違いによって東西出雲の関係は敵対していたとは考えにくい。

8 おわりに

中村1号墳の石室を位置付けるため、石室玄門構造に注目して、横穴式石室の変遷を検討した。まず、導入期の横穴式石室の玄門構造からI～IV類にわけて、玄門構造に限らず玄室の高さが高いものから低いものへ変化することを示した。そして、玄門に両袖をもつI類石室を玄門構造からa～i類に分けて、須恵器を中心とした副葬品との時間的な関係を示し、型式組列を導き出した。これにより、I類石室は玄門部への楣式構造の導入から確立、玄門の独立、玄門の形骸化へと型式変化していることを明らかにできた。そして、III類石室との平行関係とその影響について整理し、東西出雲の石室からみた関係について示した。既往の研究で考えられてきた東西出雲の対立は、石室からは証明できず、むしろ両者は独自性を有しながら、大きな出雲を形づくっていたと考えられる。以上のような歴史的背景の中で、中村1号墳は出雲西部に位置する。そして、石室2～3期の出雲西部の中でも出雲東部との関係が読み取れる地域にある。

本稿では玄門構造を中心に石室の型式分類を行い論を展開してきた。しかし、玄門構造が不明な小型の石室も数多くあり、また、III類石室が変容した石室は島根郡などにも数多く分布する。これらについては、今後の課題としておきたい。本稿で検討した内容は十分ではないが、中村1号墳の石室を位置付けるという目的は達成できたと思う。

最後に、本稿を作成するにあたって以下の方々に、ご指導や資料見学でお世話になった。記して感謝する。

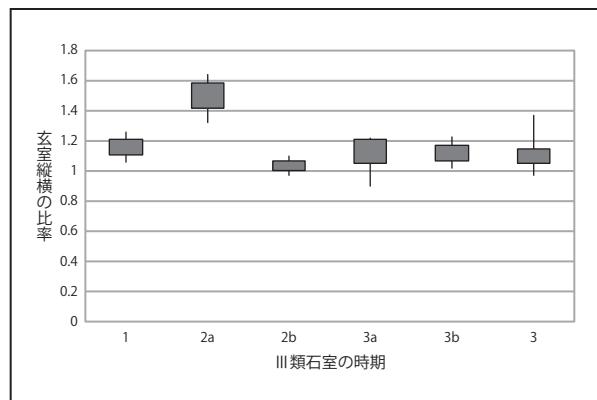
池淵俊一、大谷晃二、角田徳幸、川原和人、下條信行、宍道年弘、樋野真司、渡辺貞幸

(坂本豊治)

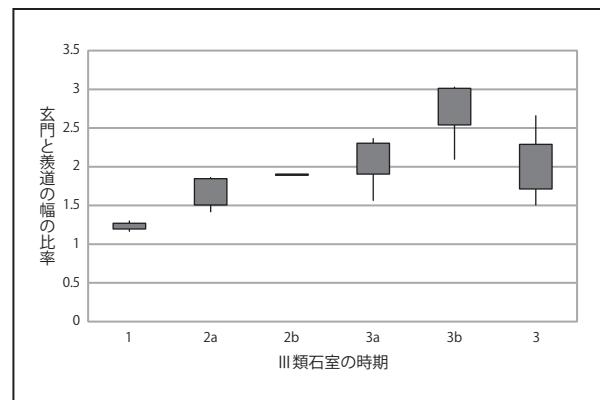
註

(1) 本稿で扱わなかった奥出雲（大原郡・飯石郡・仁多郡）については、1986年に蓮岡、1996年に角田、2007年に西尾ほかにより検討がなされている。中村1号墳の位置付けには直接関係しないので本稿では扱わなかった。

付表1 III類石室の玄室縦横比の変遷



付表2 III類石室の羨道幅と玄門幅の比率の変遷



- (2) 角田は玄室の方形化と羨道幅の拡大という指標から石棺式石室編年の細分を行っているが、その問題点を指摘しておく。まず玄室の方形化について、出雲考古学研究会は石室3期に正方形に近い形となると指摘し、角田も石室3期は、石室2b期の要素を引き継いで方形化すると指摘している。ただ、石室が方形化したのは2b期で、それ以降は2b期とほぼ同じ比率であり方形化が進んだわけではない（付表1）。石室の方形化は2a期と2b期の細分には有効であろう。そして、石室2～3期の玄室縦横比からみると2a期の石室が特異であることがわかる。羨道幅の拡大については、石室1～3b期にかけて羨道幅が大きくなっていることがわかるが、各時期のものが重なりあって変遷しており、時期を細分する根拠にはならない（付表2）。
- (3) 安来市伯太町にⅡ類石室の座生1号墳がある。これは、玄室から羨道にかけて天井石がないため、玄門部の構造が不明である。仮に天井石が取り去られただけであればⅡB類となる。出雲4期と考えられる出雲市塚山古墳もⅡ類石室であるが、その系譜は同時期の出雲市宝塚古墳（平面形は片袖のⅡ類に見えるが、立柱状の袖石が両壁にあり、I類と判断）に求められると考えている。
- (4) 研究史と本稿との相違があるので整理しておく。土生田純之や角田・西尾は妙蓮寺山古墳を今市大念寺古墳よりも古い型式と考えている。これは、妙蓮寺山古墳の石室を複室構造の初現形態ととらえ、今市大念寺古墳は完成した複室構造をなすと理解したからである。確かに妙蓮寺山古墳の羨道左側壁には短い立石があるが、右側側壁付近は閉塞石が残存していて、詳細が不明である。したがって、複室構造の初現形態と確定することは非常に難しく、よくわからないというのが現実的な評価であろう。今市大念寺古墳や上塩冶地蔵山古墳のように、玄門部には新しい構造、前門部（前室の玄門）には古い構造が採用されていることから、複室の横穴式石室は玄門部の構造で築造時期を検討すべきと考えている。仮に、妙蓮寺山古墳が複室構造としても、それは前門部のこと、築造時期は玄門部で評価する必要があり、それ故に前記したとおりの変遷と考えられる。後述する玄門部構造細分の視点で、詳述する。今市大念寺古墳の玄門は、第2表①玄門の構成から、玄門はc類であるが、前門はb類であり、前門が古い型式的特徴をもつ。上塩冶地蔵山古墳では、第2表②袖石と側壁の関係から、玄門はハ類、前門はロ類であり、やはり前門が古い型式的特徴をもつ。
- (5) 佐皿谷奥古墳の石室の楣石は欠損していて、わずかに側壁上部にその一部が残っている。
- (6) 上塩冶築山古墳の時期は本報告書の第7章第6節で詳述している。同古墳の子持壺について、池淵俊一はC1型から影響を受けてつくられたものと指摘している（池淵2004）。C1型は出雲4期の松江市団原古墳などから出土していて、出雲3期に遡るC1型の例はないようである。したがって、上塩冶築山古墳の時期を出雲4期の前半と考えた。畿内の須恵器編年ではTK43型式期の末頃であろう。
- (7) 小坂古墳は群集墳の刈山古墳群の中に位置する。この古墳の出土品は、発掘調査によって出土したものではない。小坂古墳出土と伝えられている須恵器には他の古墳の出土品が混在している可能性がある。角田・西尾（1989）、大谷（2001）も、小坂古墳の時期を出雲4期前半ではなく、4期後半と評価している。出雲4期前半の須恵器が石室分類と合わず、古墳の築造時期を表していないと評価したのであろう。
- (8) b類の岡田山1号墳とc類の今市大念寺古墳の出土品からの前後関係がよくわかっていない。仮に、c類がb類より古くあるいは同時に存在する場合も考えられ、その場合は、a類の御崎山古墳からc類とb類へ変化した可能性も想定しておきたい。本項では玄門構造を重視して、b類→c類とした。
- (9) 玄室は奥壁と側壁で天井石を支えているので基本的には壁構造であるが、玄門部分には楣式構造が採用されて

いるものがある。

- (10) 典型的なⅢ類石室ではないが、これらから変容したと考えられるものがある。それは道脇古墳（出雲郡）で、一石を削り抜いて玄室と玄門を築いている（第6図）。玄門は石室の中央に位置し、羨道は幅が広い。この特徴から、Ⅲ類石室3期と同時期頃と考えておきたい。道脇古墳の類例として、松江市西持田町の金毘羅谷古墳がある。玄門は別作りであるが、一石を削り抜いて側壁・奥壁・天井石を築いている。また、美談神社2号墳（出雲5期で、Ⅲ類石室3期と平行）は、玄門部が削抜玄門である。両側壁の手前に削抜玄門があり、Ⅲ類石室3期と同じ築造方法。ただし、開口部の位置が石室中心軸線上からずれている。また、石室平面形が縦長長方形である。これらの特徴は、典型的なⅢ類石室3期のものとは異なる。
- (11) 小坂古墳の実測図には描かれていないが、現地で確認できる。この削込はⅢ類石室2～3期に見られる特徴である。
- (12) 類例にI類石室a類の林43号墳もある。この古墳の完掘写真をみると奥壁と両袖石の掘形があることが確認できた。I類石室導入期の林43号墳の石室と中村1号墳の石室は同じ築造過程をただっていることがわかる。
- (13) 今市大念寺古墳には超大型の石室規模と複室構造、および全国最大級の規模を誇る家形石棺が採用されている。これらが、すべて出雲東部からの影響とは考えにくい。ただ、意宇郡の大豪族の墓と考えられる山代二子塚古墳の石室が不明な現状では、これ以上の評価はできないであろう。

参考文献

- 池上 悟 1982 「出雲における切石使用横穴式石室の一類型について—所謂“石棺式石室”の再検討—」『考古学研究室彙報』22 立正大学文学部 5～22頁
- 池淵俊一 2004 「出雲型子持壺の変遷とその背景」『考古論集—河瀬正利先生退官記念論文集—』河瀬正利先生退官記念事業会 498～516頁
- 出雲考古学研究会編 1987 『石棺式石室の研究』
- 梅原未治 1919 「出雲に於ける特殊古墳中ノ上」『考古学雑誌』第9巻 日本考古学会 16～32頁
- 大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会 39～82頁
- 大谷晃二 2001 「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市教育委員会 43～54頁
- 大谷晃二 2001 「出雲東部の大首長の性格と権力」『第8回東海考古学フォーラム三河大会 東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム三河大会実行委員会 103～121頁
- 小田富士雄 1986 「島根県の九州系初期横穴式石室再考」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会 301～319頁
- 角田徳幸・西尾克己 1987 「神門郡と出雲郡」『石棺式石室の研究』251～259頁
- 角田徳幸・西尾克己 1989 「出雲西部における後期古墳文化の検討」『松江考古』第7号 松江考古学談話会 5～42頁
- 角田徳幸 1995a 「石棺式石室の系譜」『横穴式石室にみる山陰と九州』出雲考古学研究会 1～15頁
- 角田徳幸 1995b 「出雲の後期古墳文化と九州」『風土記の考古学』③『出雲風土記』の巻 同成社 149～175頁
- 角田徳幸 1996 「出雲西部の横穴式石室」『山陰の横穴式石室—地域性と編年の再検討—』第24回山陰考古学研究集会 山陰考古学研究会 25～29頁

角田徳幸 2007 「山陰における九州系横穴式石室の様相」『日本考古学協会 2007 年度熊本大会研究発表資料集』

日本考古学協会 2007 年度熊本大会実行委員会 71 ~ 116 頁

角田徳幸 2008 「出雲の石棺式石室」『古墳時代の実像』吉川弘文館 72 ~ 107 頁

川原和人 1982 「出雲西部における横穴式石室の形態及び築造工程について」『賀川光夫先生還暦記念論集』 賀

川光夫先生還暦記念会 373 ~ 392 頁

佐藤雄史 1990 「島根半島西部における横穴式石室の様相」『島根考古学会誌』第 7 集 島根考古学会 4 ~ 69 頁

仁木 聰 2010 「山陰地方における後期・終末期古墳の領域性」『出雲国の形成と国府成立の研究』 島根県古代文化センター 239 ~ 257 頁

西尾克己・大國晴雄 1991 『出雲平野の古墳』 出雲市民文庫 9 出雲市教育委員会

西尾克己 1999 「出雲西部における上塩冶築山古墳の石室と石棺の位置付け」『上塩冶築山古墳の研究』 島根県教育委員会・島根県古代文化センター 119 ~ 127 頁

西尾克己・坂本諭司・稻田 信・松尾充晶 2007 『斐伊川中流域における後期古墳の様相—横穴式石室・横穴墓集成—』

西尾良一 1986 「大社造と横穴式石室」『山陰考古学の諸問題』 山本清先生喜寿記念論集刊行会 333 ~ 372 頁

野津左馬之助 1924 「島根県内の石室」『島根県史』 4

森本 徹 2008 「山陰地方における古墳の終焉」『研 調査報告』第 6 集 大阪府文化財センター 135 ~ 162 頁

蓮岡法暉 1986 「島根県仁多町無木古墳群の横穴式石室について」『山陰考古学の諸問題』 山本清先生喜寿記念論集刊行会 321 ~ 332 頁

土生田純之 1983 「横穴式石室にみる古代出雲の一側面」『考古学論叢』

山崎信二 1986 『横穴式石室構造の地域別比較研究—中国・四国編—』

山本 清 1953 「遺跡の示す古代出雲の様相」『出雲國風土記の研究』出雲大社 413 ~ 447 頁

山本 清 1956 「須恵器より見たる出雲地方石棺式石室の時期について」『島根大学論集（人文科学）』六号

山本 清 1964 「古墳の地域色とその交渉—山陰の石棺式石室を中心として—」『山陰文化研究紀要』 5 号 島根大学

渡辺貞幸 1985 「松江市山代方墳の諸問題」『山陰地域研究』第 1 号島根大学山陰地域研究総合センター 1 ~ 16 頁

渡辺貞幸 1986 「山代・大庭古墳群と五・六世紀の出雲」『山陰考古学の諸問題』 山本清先生喜寿記念論集刊行会 221 ~ 238 頁

渡辺貞幸 1995 「弥生・古墳時代の出雲—『風土記』と考古学の接点—」『風土記の考古学』③『出雲風土記』の卷 同成社 67 ~ 86 頁

図版出典

本稿で使用した図面は、各報告書から転載したものである。一部には、報告書を修正や再トレースしたものがある。